

日本と中国

⑪ 安倍総理の靖国参拝で想ったこと

去る12月26日、安倍晋三総理が靖国神社を参拝した。おかげで、私の正月は暗然たるものになってしまったが、何事にもプラスとマイナスの両面はあるはずだ。

中国社会が（いまのところ）平静を保っていることは、その一つだ。

平静を保つ中国社会

ここ数年の尖閣をめぐる日中摩擦で、政府が採った「対抗措置」や一部民衆の過激な「抗議」行動は、国際社会の批判を招いてしまった——中国にはそういう反省がある。今回の「自制」がその表れなのであれば、日中関係が片々たる政治事件で大きく揺さぶられる残念な傾向に変化が見えてきたのかも知れない。

「政経分離」方針が取られそうな気配もある。今回の参拝で、安倍総理任期中に日中関係が正常化する可能性はさらに遠のいてしまったが、いまの中国の最優先事項は、いま直面する経済難局を切り抜けることであり、参拝を契機に、経済関係まで冷却してしまっただけという判断があるのだろう。経済再生を目指す日本も事情は同じ、ぜひその方向で推移してもらいたい。

中国はこれらの「利害得失」だけで過激な抗議を「自制」している訳でもなさそう。今回は、日頃タカ派論調で知られる「環球時報」

法であり、大国になった中国には相応しくない」「(大国たる中国が)日本の一挙手一投足で振り回されてはならない」——ここには、騷擾(そうじょう)を警戒する当局の意向だけでなく、習近平主席が掲げる「偉大な中華文明の復興(=「中国夢」)」と通底する「大国アイデンティティ」とでも形容すべき気分を感じ取れる。

中国アイデンティティ、リニューアル中

「歴史トラウマ」からの脱却? 中国人の心理には、「列強の侵略を受けて領土を削り取られ、最貧国水準にまで落ちぶれた」というルサンチマン(被害者意識)が長く濃い影を落としてきた。この「歴史トラウマ」に触れる問題が起きると、「愛国主義」という強大な「集団同調圧力」が働き、「ここで同調しないと『漢奸(売国奴)だ』と糾弾される」という恐怖感が人々の心にかかってきたのが中国社会である(「漢奸タブー」)。

が何篇も興味深い社説を発売した(そこに表れた傾向の功罪、成り行きは即断できないが)。

「抗議デモは他に術のない小国が強大な国に対して執る反撃方法であり、大国になった中国には相応しくない」「(大国たる中国が)日本の一挙手一投足で振り回されてはならない」——ここには、騷擾(そうじょう)を警戒する当局の意向だけでなく、習近平主席が掲げる「偉大な中華文明の復興(=「中国夢」)」と通底する「大国アイデンティティ」とでも形容すべき気分を感じ取れる。

「歴史トラウマ」からの脱却?

中国人の心理には、「列強の侵略を受けて領土を削り取られ、最貧国水準にまで落ちぶれた」というルサンチマン(被害者意識)が長く濃い影を落としてきた。

この「歴史トラウマ」に触れる問題が起きると、「愛国主義」という強大な「集団同調圧力」が働き、「ここで同調しないと『漢奸(売国奴)だ』と糾弾される」という恐怖感が人々の心にかかってきたのが中国社会である(「漢奸タブー」)。

近代中国に最大の不幸をもたらした日本から、こんなことを言うのは気が引けるが、このトラウマやタブーを克服することが現代中国の大きな課題である。

飛躍的な経済成長によって世界から崇敬の念で見られることで、中国人が誇りを取り戻し、心の傷を癒やせる可能性が生まれた。この10年の飛躍的な経済成長は13億人を均しく潤した訳ではないから、その途は平坦ではないが、古傷を癒やす心の余裕が生まれた中国人は、次第に増えている。

受け容れ可能な「大国アイデンティティ」に向けて

リーマン・ショックを経て、中国人の意識の変化はさらに加速した。そこには「米国をGDPで追い抜くのも時間の問題」といった脳天気な楽観も混じっていたが、この5年間で中国が押しも押されもせぬ大国に出世したことは、紛れもない事実である。

環球時報が大胆な社説を発売したことは、トラウマやタブーから自由でいられる中国人が増えた証拠のようにも思えるが、その克服は「大国アイデンティティ」と表裏一体に進みつつある。

そうであるなら、この「大国アイデンティティ」が隣人にとっても受け容れ可能なものになるように、日本もうまく共存する算段をしなくてはならない。もちろん「拍手は片手ではできない」が、こういう変化を見ないばかりか、世界中から疎ましがられるような独りよがりをしていたので、日本の未来は拓けない——そんなことを思いながら、この正月を過ごした。

(津上工作室代表・津上俊哉)